びわこ学院大学短期大学部　令和六年度 学校推薦型選抜（公募推薦）「教養問題」

（注）設問で指示した字数には句読点等も含みます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

＊一部改行箇所等を改めています。

ある学生が報告してくれた話。中学の卒業式で、お母さんが、友だちのお母さんの着物をほめたそうです。いわく――「いざというときはきれいですね」。これを聞いて、相手のお母さんが（1）怒るまいことか。まあ、当然でしょう。

［　　A　　］、と受け取られたのです。よくある誤解と言えばそれまでですが、このような行き違いは、助詞の持つニュアンス（感じ）の重要性をよく示しています。この例では、「いざというときは」の「は」が、相手の怒りを招くきっかけになりました。「は」は、「この場合に当てはまるが、ほかの場合に当てはまらない」という感じを表す用法があるからです。「僕は大学生です」などと言うときの「は」には、そういうニュアンスはなく、単に「僕」について話している、ということしか表していません。「ほかの人は違いますけどね」というような感じは（ふつうは）ありません。先ほどのお母さんも、あることについて話している、という意味の「は」のつもりで、「いざというときはきれいですね」と言ったのかもしれません。それが意図しないニュアンスを生んでしまったのです。

先に見た「お茶でいいです」の誤解も、これと似ています。「で」は、本来は、「京都で会議をする」とか「富士山五合目で落石があった」とかいうように、場所などの事実関係を客観的に示す助詞です。ところが、「お茶でいいです」というふうに使うと、「まあこのへんで（A）ダキョウしておこう」というニュアンスが現れて、誤解のもとになるのです。

（　Ⅰ　）、助詞には、事実関係を客観的に表す場合と、ニュアンスを表す場合とがあります。「が」「を」「に」などの格助詞は、だいたい（B）ゼンシャの用法で用いられます。「で」も格助詞ですが、今見たように、ニュアンスを表すこともあります。「は」はニュアンスを表す場合がさらに多くなります。

ニュアンスを表すということがどういうことかは、グラスに半分入っている酒を見て、せりふをつぶやいてみると分かります。いろいろな助詞を使って表現できます。

a「グラスに酒が半分はある」（　　①　　）　b「グラスに酒が半分もある」（　　②　　）

c「グラスに酒が半分しかない」（　　③　　）　d「グラスに酒が半分だけある」（　これっきりだ　）

事実としては、「グラスに酒が半分ある」ということにまったく変わりないのに、aからdの文が与える印象はそれぞれ（C）ビミョウに違います。よく、bの「半分もある」は楽観主義者の見方で、cの「半分しかない」は悲観主義者の見方だ、などと言われます。そうした見方や感じかたの違い、つまりニュアンスの違いを表しているのは、助詞の部分です。

事実そのものは変えず、事実の見方や感じかたを表現する助詞のことを「副助詞」（副詞ではない）と言います。「副」は「意味を副（そ）える」ということです。副助詞には、「は」「も」「しか」「だけ」のほか、「さえ」「すら」「ばかり」「ほど」「くらい」「まで」「でも」などの種類があります。

落語の中にも、副助詞が誤解の元になるエピソードがあります。

大工の与太郎が家賃を溜（た）め込んだために、大家に道具箱を取られてしまいます。話を聞いた棟梁（とうりょう）（落語では「とうりゅう」）が大家の所に行き、何度もていねいにわびて、家賃のほとんどを払います。ところが、８００文（もん）だけ足りません。棟梁は次のように頼み込みます。

そこんところは、あっしに免じてひとつ勘弁していただいて、で……まあ、あとァたかが八百の事（こと）でござんすから、まあついでででもありましたらお宅へ届けるってことにして、今日のところは、大家さんひとつ、道具箱を渡しておもらい申してえんで、へえ。

（三遊亭小遊三（こゆうざ）「大工調べ」＝ＮＨＫ教育「日本の話芸」２００８年６月10日放送）

（　Ⅱ　）、この大家ときたら、根っからのけちん坊で、８００文は自分にとって大金だと言い張ります。さらに、こうつけ加えます。

なんだいその、「ついででもあったらお宅へ届ける」てえなあ。じゃあ何かい棟梁（とうりゅう）。その「ついででも」てえ「でも」がないときゃあ、八百はそれきりになっちまうってえのかい。

（同）

ほとんど言いがかりです。こんなふうに言われ続けた棟梁はついに頭に来て、大悪態をつき、ついには（D）サイバンに――という展開になるのですが、それは後の話です。ここでは、「でも」が行き違いを生んだことに注目してください。

「でも」は、先に挙げたとおり、副助詞のひとつです。はっきり決めるのでなく、軽く例として示す感じを表します。「テレビを見る」は客観的事実ですが、「テレビでも見ようか」となると、ほかに暇つぶしの方法があればそれでもいい、というニュアンスが出ます。「コーヒーでも飲もうか」なら、べつに紅茶でもいいのです。棟梁が「ついででもありましたら……」と言ったのは、「つい

での時に」ぐらいの意味だったのでしょうが、意地悪く取れば、「たとえば、ついでがあったような場合に届けます」と、一例を示しただけだとも言えます。「ついでの時に必ず持ってまいります」と約束したわけではありません。この場合、（2）大家は誤解したというより、ことさらひねくれた解釈をしたのです。でも、次のような行き違いなら、日常的によく経験します。

写真家の女性が、自分で撮った山の写真を持って、なじみの喫茶店にやって来ました。居合わせた男性客にほめられて、彼女は喜びます。

アキ（鈴木蘭々）　岩手山ってねえ、何度撮っても撮り飽きないんですよ。〔略〕

田辺（温水洋一）　それは写真を撮る人の心が表れてるからなんですよ。〔略〕まあ、これ〔＝この写真〕でも見ながら食べますか……。

アキ　〔むっとして〕これでも？

（ＮＨＫ「連続テレビ小説・どんど晴れ」２００７年７月14日放送）

（　　Ⅲ　　）写真をほめたのに、〈これでも見ながら〉の一言で台なしです。「ほかの絵か何かでもいいんだけど、とりあえずあなたの写真を見ながら」という感じになってしまいます。ここでは、よくないニュアンスを含む「でも」ではなく、客観的事実を表す格助詞「を」を使って、「これを見ながら食べますか」と言えばよかったのです。

副助詞の中には、「しか」「だけ」など、程度の意味を副えるものがいくつもあります。ほぼ同じ程度を表す場合でも、助詞を替えるとニュアンスが変わることがあります。

海野碧（あお）さんの『水上のパッサカリア』（光文社）は、日本ミステリー文学大賞新人賞を受けたベストセラーです。この小説が（E）カンコウされた時、新聞広告に、北村薫さんの推薦文（新人賞の選評）が載りました。

読後、思わず、「パッサカリア」のＣＤを探し、かけてしまった。要するに、そうさせるだけの作品であった。

（『毎日新聞』２００７年４月14日　３面）

パッサカリアというのは、〈スペイン起源と考えられる、三拍子のゆるやかな民族舞曲〉（『三省堂国語辞典』第６版）です。小説のモチーフとなった舞曲はいったいどんなものか、北村さんは確かめたくなったと言うのです。ところが、（3）〈そうさせるだけの作品〉という表現は、誤解を生みそうです。

（飯間浩明『ことばから誤解が生まれる』中公新書ラクレ）

問一　傍線部（A）～（E）のカタカナを漢字で書きなさい。

（A）ダキョウ　（B）ゼンシャ　（C）ビミョウ　（D）サイバン　（E）カンコウ

問二　（　　）Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに最も適する語を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⅰ、（ア、そこで　イ、だから　ウ、つまり　エ、そして　）

Ⅱ、（ア、ところが　イ、そもそも　ウ、もっとも　エ、ところで　）

Ⅲ、（ア、もともと　イ、なるほど　ウ、もちろん　エ、せっかく　）

問三　文中のａ～ｄに使われている副助詞（傍線の部分）が表しているニュアンスの違いについて、（　　）①・②・③それぞれに入る適語を次より選び、記号で答えなさい。

ア、少なめだ　イ、少ないなあ　ウ、多いなあ　エ、多くはない　オ、少なくとも半分だ

問四　［A］に適する、誤解の内容を考えて答えなさい。

問五　傍線部（1）「怒るまいことか」の表現法として適する用法を次より選び、記号で答えなさい。

ア、断定　イ、強意　ウ、疑問　エ、反語　オ、念押し

問六　傍線部（2）「大家は誤解したというより、ことさらひねくれた解釈をしたのです」とありますが、大家はどのような解釈をしたと考えられますか。簡潔に答えなさい。

問七　傍線部（3）「〈そうさせるだけの作品〉という表現は、誤解を生みそうです」とありますが、どのような誤解を生む恐れがあると考えられますか。簡潔に答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつての日本の川はゆるやかに（A）ダ行していた。水の流れは曲がりくねりながらスピードを落とし、ときに河川敷の草原や林に浸入した。私の記憶のなかにある武蔵野の小川もそうであったように、川の流れのゆがみやたわみが、不均等に流れゆく川の時間をつくりだしていた。そしてそのゆらぎつつ流れる川こそ、日本の農村の川であったのである。

いま私たちは、昔からの生活が残っている社会に行くと、そこではまだ時間がゆっくりと流れているような感覚をいだかされる。実際都市の時間と村の時間の時間速度の違いは、社会学のテーマのひとつでさえあった。

しかし私は、時間速度の遅さに村の時間の特徴があるとは思っていない。村の時間は、ときに荒々しく、ときに漂うように流れている。均一に流れゆく直線的な時間が都市を支配しているとすれば、（1）ここにはゆらぎゆく時間が成立しているのではなかったか。あるいは都市では客観的な時間が人間を管理しているのに対して、村の時間は村人の営みとの関係のなかにつくられていた。

農民の一年とは、同じ速度で歩む時間によって構成されてはいない。荒起こしから田植えを終えるまでの春、夏の草取り、秋の刈入れ、そんなとき時間は、しばしば［A］された歩みをみせる。そしてその合間にあらわれる漂うような時間。季節のなかで時間は絶えずゆらいでいる。

一日のなかでも同じことだ。畑仕事しているときも、村人たちは、凝縮された時間とまるで惚けたような時間をつくりだす。時間はときにすばやく過ぎ去り、ときに漂うようにさまよいつづける。ここでは時間は、都市のように人間たちを外から管理し、価値を生み出す客観的な基準ではなくて、村人の暮らしとともに等身大で存在しているものなのである。

そしてこの都市の時間と村の時間、あるいは近代社会がつくりだした時間と伝統的な時間との相違が、村落共同体が河川改修の主体になっていた時代と、近代国家がその主体になった時代との、川の流れの違いをつくりだしたように私には思われる。ゆらぎゆく水の流れを川に求めた思想は、そのまま村人たちの時間的世界の表現だったのではなかろうか。

そしてこのように考えるとき、かつての武蔵野の小川もまた、農村の川として記憶のなかに甦ってくるのである。あの小川は曲がりくねりながら、田畑を流れ、（B）雑木林の横を、そして丘陵の下を流れていた。農民たちはその川からわずかばかりの水田に水を引き、夕暮れには岸辺に野菜を洗った。

その川が消えていったとき、農村としての武蔵野もまた失われていたのである。この地に新しく移住してきた市民たちが、川に、大地の上での営みとの結びつきをみつけだすことはなかった。川は単なる水路であり、ときに排水路でさえあった。それはおそらく、サラリーマン家庭であった新住民たちは、時計の時間という［B］で、直線的で、客観的な時間に支配されていて、自己の存在との関係のなかに成立する農民の時間をみつけだすことはなかったか、あるいは（2）それを遅れたものとみなしていたからである。大地や川とともにつくられる時間的世界は、それを自己の営みのなかに内包している人々だけのものであった。

（内山節『時間についての十二章』一般社団法人農山漁村文化協会）

問一　傍線部（A）のカタカナは漢字に直し、（B）の漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

（A）ダ行　　（B）雑木林

問二　傍線部（1）「ここにはゆらぎゆく時間が成立しているのではなかったか」について、次の各問いに答えなさい。

（a）「ここには」の「ここ」は何を指しているのかを答えなさい。

（b）「ゆらぎゆく時間」とはどういう時間か。その内容を示した表現を文中より二十字以内で抜き出しなさい。

問三　傍線部（2）「それ」の指す内容を答えなさい。

問四　［A］・［B］に当てはまる二字の言葉を、それぞれ文中より抜き出しなさい。

問五　筆者の趣旨と一致するものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、都市の時間に対して、村の時間はゆっくりと流れ、安らぎを感じさせるものだ。
イ、村の時間は、客観的な基準ではなく、農耕などの人々の営みの中でつくられたものである。
ウ、農民は田植えや草取りなどの凝縮された歩みから解放され、漂うような時間を得るようになった。
エ、今後、伝統的な時間と近代社会がつくり出した時間が共存できる社会をつくることが重要だ。
オ、都市の時間と村の時間との違いを分析する中で、日々の暮らしのあり方を考えることは必要だ。